

その夜、
爆乳退魔師は
雌になる

White croaker



do not share



ああ、またこの夢か…



「月瑛子様…愛しております。
この上なく、愛しております」

「……どうもなやう。」

私は由緒正しき退魔師の家系の一つ、
波間家現頭首、波間月瑛子です。
身の程をわきまえなさい。」

「旦那様が亡くなってからずっと、
その寂しい身体を僕が温めたいと思っておりました」

「…汚らわしい！
その手をどけなさい、遥…」



「大きい胸とは思ってましたが、
乳首も大きいですね…」

「息子同然のように育ててきたつもりですが、
こんなケダモノだったなんて、恥を知りなさい」



「……だったらどうして、
カづくで俺を止めないんです？」

「本当は俺とセックスしたいと
思っているのでは？」



「月瑛子様、好きです。大好きです。」

（……やめて♡
そんなこと言ったら
いけません……♡）

（ああ……ダメえ……♡）

「セックスしたい……。俺のものになって、月瑛子様……！」





その夜、爆乳退魔師は雌になる

「お母さま。
今朝の修業もお疲れ様でした！」

「はい、今日も一日精進するのですよ」




（はぁ…また昨晚も破廉恥な夢を…。
ここ数日、毎晩あの子が
私を夜這いする夢を見る…。
いったいどうして…？
何か深い理由でも…？
……………わからない）




「遥お兄ちゃんおはようー。
ねえねえーどうして遥お兄ちゃんは
毎朝筋トレしているの？」

「おはよう」ございます。卯月さま。
私は霊力がないゆえに、
いざとなったら何のお役にも立てないので、
こうして少しでも筋力を鍛えているんですよ」





「…遙は、私たちの子供ではない。
10年以上前に、友人夫婦が妖魔に食われ、
彼も食われそうになったところを私たちが保護をした」



「そして、身寄りがなかった彼を
そのままうちで育てることになり、
今は恩を返したいという理由で、
波間家のために働いてくれている…」

「そう、私にとって遙は、血の繋がりはないけど、
息子のような存在で…」



「遥！」

「月瑛子さま、すぐに朝食の支度を…あっ！」

フワ…





(遥……)

「も、申し訳「ぎ」いません…
…少し、筋「つ」れしすぎたようです。
失礼します…!」

「ムッ」



（…最近、遥の様子がおかしい。
顔色も悪いし、少し痩せているように感じる…。
生気が…ない…？
心配だ。すごく心配です…。
もしかして、遥に色々無理させてる…？
し、しかし！波間家の一員として厳しくはしてるけど、
けして無理強いとかはしていないはず…！

…そうだ、妖魔の仕業じゃないかしら？
この屋敷には強力な結界が張られているから、
そう簡単に妖魔が侵入することは
できないと思うけど、
念のため、屋敷の結界の様子を…



確かめた方がいいかもしれないわね…)



ああ……またこの夢だ

「汚らわしい肉の塊ですね…。
あなたはいつも私の身体を想像して、
この醜い肉棒をじごいているの？」


「も、申し訳ございません…！」

「否定はしないと…。恥を知らなさい」

「んっ…」







「冗談です…。本当はとても嬉しいのです。
こんなにかつ「よくて、
女を一瞬でダメにするような
凶悪なオチ○チンに成長して、
私は誇らしく思っているのです」

「あっ……ゆ、月瑛子様……」

「ああ…月瑛子様が俺のチ●ポを！

あっ！あっ！すごい！

月瑛子様の吸上げるようなストロークフェラが裏筋を刺激して最高に気持ちいいです！

も…もっともっとー！」

フェラ

フェラ



「ああ好きです、好きです月瑛子様！
ずっとお慕い申しておりました！
だから、俺の精子をたくさん…飲んで…！」

「わたしも…んっ♡好きです♡
たくさん射精してくださいひゃいね…♡」

グ
グ
グ

グ
グ
グ



（ふう……どうやら、結界の小さな穴から
下級の妖魔が侵入して、遥に憑りついて
生気を吸っていたようね……
大方、下賤な夢を対価にしていたのでしよう……）



（最近私が見る夢も、
先ほどの妖魔の何かしらの影響で
夢に干渉してきたのでしよう……
まったく、人騒がせな……ん？）

「!」

(は、遥のアンロ…)

すごく膨らんでる…!!

妖魔は祓ったのに…

どうして…?!



(だ、ダメよ…
落ち着きなさい…
どうして勝手に
脱がそうするの…！)

ズル…

(だって、そうしないと
遥のアンコが苦しそうだから…
けして、やましい気持ちには…！)



（え？え？すごく…大きい…）

あ、あの人よりも…たぶん…

って、何を考えているの…

こ、これはあれよ…

妖魔の…、憑りつかれていた影響よ…



（だったら…私が鎮めてあげないと…）

「ん…？あれ？なんか、アソコがあたたい…？」

「は、はいらない…んっ♡
遥の、オチ●ポ、おおきすぎっ…♡
あんっ♡」

ポッ…

「…えっ？ゆえっ？ゆえっ？」



「は、遥…♡」

「これは…俺はまだ夢を見ているんでしょ…？」

「え、ええそうよ…♡これは夢だから」

「私、まかせて♡一応、ゴムもしてるから…♡
安心なさーい…♡」



「あっ♡あっ♡あっ♡あ、あなたは
妖魔に憑りつかれているの♡
だから、私がこうして、妖魔を、祓ってる…♡」

「妖魔を…！そんな、じゃあこの夢は、
妖魔の仕業…くっ！」

チュ
ピ

チュ
ピ

「ま、負けてはダメよ。快楽に負けちゃ…！」



（ああ、私は何を言ってるの♡
快楽に負けそうなのは、私の方じゃない…♡
久しぶりの男性器でしかも、
太くて長い、極太チ●ポ…♡）

チ●ポ

チ●ポ

チ●ポ

（だめ…♡忘れていた何かが目覚めそう…♡）





「くっ……だめです！
気持ちよすぎます！
月瑛子様のオマ●最高です……！」



(私も……
本気になっちゃいます……♡)

(ああ、嬉しい……♡
私で感じてるのね、遥……♡)

クワッ

クワッ



「!!」

F

「ゆ、月瑛子様！」

F

（キ、キスされてしまった…♡）

「いきなりキスをするだなんて…
きよ、許可した覚えはありませんよ…」

「ごめんなさい…。」

でもどうしても我慢できなくて…。
月瑛子様のこと…好きすぎるから…」

「…♡」

キス

キス



「俺も手伝います…。たぶんきつと、このムラムラのせいなんですよね…！」

「あっ♡…！」

「俺がさっさとイってしまえば…」

「だめっ…♡
そんな太い棒で、
力いっぱい腰を動かしてもしたら…」

クッ

クチュ





「あっ……♡ああああああん♡」



「だめ♥すごい♥遥のオチ●チンす」すぎる♥
全力の腰使いとデカチ●ポのせいだ、
お、奥まで届いてきている♥」

「敏感なところをカリでえぐられて、
こんな味わったことがない♥
ある意味妖魔より厄介♥
き、気持ちいい……♥♥♥」

ブルブル

ブルブル

キュッ

ズッ

キュッ

「ああん♥ひっ♥あっ♥でもだめっ♥
「こんなの認めない♥私は、波間家の女…あんっ♥
ただの肉欲に溺れるわけには…おっ♥おとおん♥」

「ああ腰が止まらない！」

「膣内もキツキツで、ヌルヌルで、
俺のチ●ポが月瑛子様のオマ●コに
食べられてるみたいだ！」

ブルン

ブルン

アゲアゲ

アゲアゲ



「月瑛子様！」
「んっ！」





だめっ♥またキス…♥しかも濃厚…♥
く、回の中がすっかり犯されてる♥
遥の舌でヌルヌル…♥
ああ…だんだん頭がぼーっと…)



ひいああ♥あっ♥あっ♥だめっ♥
頭が真っ白に…いやらしいキス、
気持ちよすぎる♥♥
ペロチュー〜しゅ〜♥もっとなもっとな♥



「ふはっ♡い、いけません♡こんな変態みたいなキス♡
破廉恥すぎます♡」禁制です♡♡」

「ああ月瑛子様！そろそろ出る！
イキますよイキますね！」

「い、いいわ♥きなさい！
全部出して、すっきりしなさい♥」

（わ、私もイク…♥イっちゃう〜♥）





「うっ……」

（あああああああ♥出てる♥それも大量に♥
ゴム越しから伝わる熱もすごい……♥）

（これが若い精液……♥
……♥進った雄の性のしずく♥
……♥いい♥いいわ♥）



「はあはあ。月瑛子様…まだ全然治まりません…
これも…妖魔の影響でしょうか？」

「……」

「まだ…していいですか？」

「……一回だけ…なら。」

「ゴムはそれしかないから…、
出すなら外に…お願いね…♡」



「あー…素晴らしいお尻ですよ月瑛子様」

（ほ、恥ずかしい…。
夫ともこんな獣じみた
体位でなんか
やったことないのに…
でも、すごく
ドキドキしてる…♡）

「それじゃ…」





「はっっ♡」

（ああああ♡

入ってきた♡

遥の生才チ●チン♡

こ、これすごい♡

形がはつきりとわかつちやう♡

しかも、こんな体勢でも

お、奥に♡すごい♡）

ズ
ズ
ズ



（お、おおお♥はるかの♥
オチ●ポがゆっくり…♥
あっ♥あっ♥ゾクゾクする♥
おっ…♥
くるっ…♥激しいの来る…♥）

（だめ♡「れ♡す♡す♡きん♡
お尻から気持ちいいのが
全神経に伝わって、
下品な声が抑えられない♡
いい♡気持ちいい♡
もっと♡もっと欲しい♡）

IP、 IP、 IP、





『おおおん♡
♡♡♡いいわあ♡』

『月瑛子様！』

俺も気持ちいいです！
月瑛子様生の肉感が
俺のチ●ポに絡みついてきて…
くっ…!! ずっとずっと
こうしてたいです!』

ハッ

ハッ

ハッ

「私も…私もずっと寂しかった♡
あなたの気持ちに
気づいてから、ずっと♡」

（そう、私は気づいていた。
彼の気持ちに…。
夫が亡くなってから、
より献身的に支えてくれる
彼の優しさとその眼差しに…）



「月瑛子様！」

「あっ♡あっ♡いいわ♡」

「もっと激しく♡」

「もっとめっちゃくちゃ♡」

「その逞しい肉棒で
かきまわして♡♡」



「月瑛子様！月瑛子様！」

「ああ♡♡♡♡
ほんと素敵♡」

「大好きです♡
大好きですよ遥♡」



「俺も好きです！月瑛子様！」

「わたしも好きヨ♡
もうはるかの好きに
してイイから♡
わたしでイって♡」



「あゝ……出します！
もう出ます！」

「おっ♡おっ♡
い、い、い♡
でも、おち○風は、
や、や、や♡」

「ああああ♡だめえ♡
わたしもイきます♡いつちやいますっ♡」





「あつい♥あつすぎる♥はるかあ♥」

「あはああん♥デてる♥
はるかっ♥だっ、だめっていったのだ♥」

「ほ、はるか…」

「月瑛子様…もう一回…」

「あん…♡」

「あ、あと一回…
だけですよ？」

もちろん1回きりじゃなく…
何度も何度も抱かれました…♡



それから数日後……



「遥お兄ちゃん、おはよう!」

「おはよう!」ぎいます。卯月様」

「あれ?なんだかおげんき?
顔色が明るくなったね!」

「はい、これも全て、月瑛子様のおかげで...」

「え?ママのおかげ?」



「そうだ！
今度海に行こうよ！
夏だし！
ね？いいでしょー！」



「それは……あつ」

「ゆるしません」



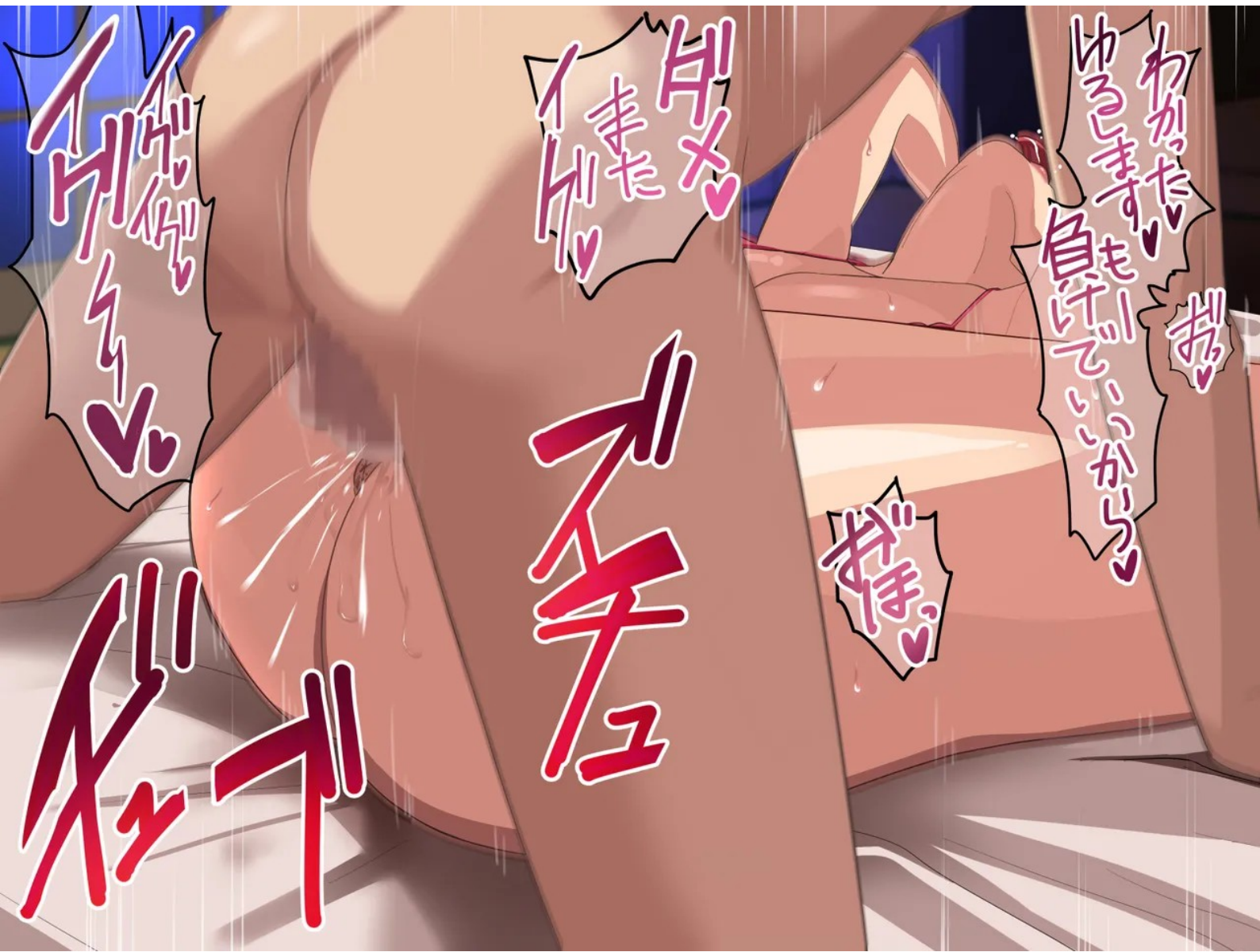
「えー」

「あなたは修業です。
この夏も厳しく行きますよ」

「で、ですが月瑛子様…
たまには休息があっても
よろしいんじゃない
でしょうか…?」

「…波間家現頭首の私に意見ですか…。
最近あなたも言うようになりましたね。
仮にも私はあなたの親代わり。
血が繋がってはいないとはいえ、
もつと厳しくしつめる必要が





「もっと厳しくしつつけるんじや
なかつたんですか…?」

「私が愚かでした…♡
遥のチ●ポの前じゃ、
ただのメスなのだ…♡」

ドク
ヒューッ





後日、あの妖魔について
調べてみたら……

「……特に、憑りついた者以外に
影響を及ぼすようなことは
書いてませんね……はて」
（まさか……、
欲求不満なだけだった……？）

あとがき
お買い上げありがとうございます。
今後ともよろしくお願いいたします。

本文やその一部をインターネット上に
無断で転載、翻訳、再配布することを禁止します。
Reproducing all or any part of the contents is prohibited.